

日本脳炎

(1) 病気の説明

日本脳炎ウイルスの感染で起こります。ヒトから直接ではなくブタなどの体内で増えたウイルスが蚊によって媒介され感染します。7～10日の潜伏期間後、高熱、頭痛、嘔吐、意識障害、けいれんなどの症状を示す急性脳炎になります。ヒトからヒトへの感染はありません。

流行は西日本地域が中心ですが、ウイルスは北海道など一部を除く日本全体に分布しています。飼育されているブタにおける日本脳炎の流行は毎年6月から10月まで続きますが、この間に、地域によっては約80%以上のブタが感染しています。以前は小児、学童に発生していましたが、予防接種の普及などで減少し、最近では予防接種を受けていない高齢者を中心に患者が発生しています。感染者のうち100～1,000人に1人が脳炎を発症します。脳炎のほか髄膜炎や夏かぜ様の症状で終わる人もいます。脳炎にかかった時の死亡率は約20～40%ですが、神経の後遺症を残す人が多くいます。

(2) 使用ワクチン:乾燥細胞培養日本脳炎ワクチン(不活化ワクチン)

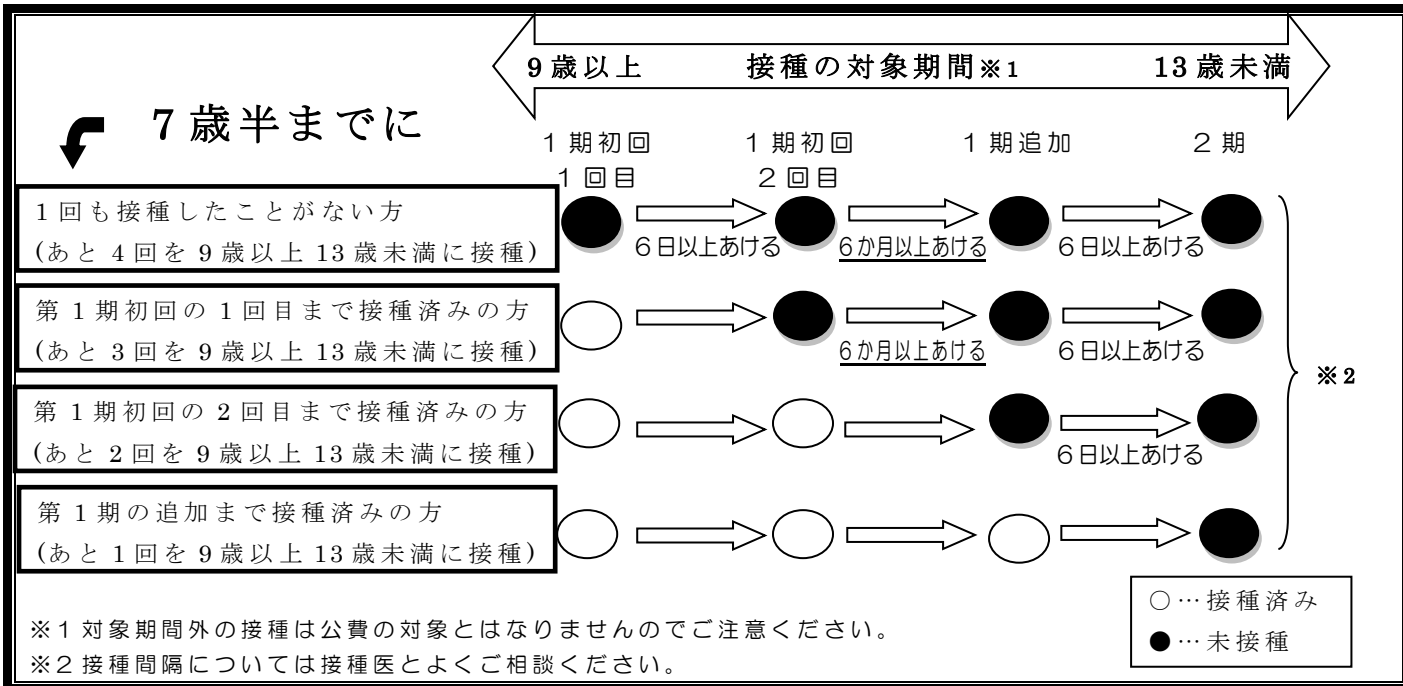
乾燥細胞培養日本脳炎ワクチンは、ペロ細胞という細胞でウイルスを増殖させ、ホルマリンなどでウイルスを殺し(不活化)、精製したものです。

(3) 平成19年4月2日から平成21年10月1日生まれの方の接種方法について

生後6か月～90か月の間に第1期(初回1回目、2回目、追加)の接種ができなかった場合、日本脳炎の第2期の対象年齢である9歳以上13歳未満に、第1期の不足分を公費で接種することができます。

(対象年齢は誕生日の前日となるため、13歳の誕生日は対象外となりますのでご注意ください。)

附則第4条第2項対象者(平成22年3月31日までに第1期を全く接種していない者)は、7歳半(生後90か月)までの接種状況により、以下の間隔をあけて接種してください。



★附則第4条第1項対象者(平成22年3月31日までに1回以上接種したことがある者)は、残りの回数を9歳以上13歳未満の間に全て6日以上あけて接種してください。

(4) 副反応

現在使用されている乾燥細胞培養日本脳炎ワクチンの添付文章によると、臨床試験において、副反応として熱や咳、鼻水が出る、注射部位が赤くなったり腫れたりするなどの反応が認められ、これらの副反応のほとんどは接種3日後までにみられたとされています。

なお、その他にショック、アナフィラキシー様症状、急性散在性脳脊髄炎(ADEM)、脳症、けいれん、急性血小板減少性紫斑病などの重大な副反応の発生も完全には否定できません。